

防災教育を中心とした実践的安全教育総合支援事業報告書【防災に関すること】

学校名「熊本県立湧心館高等学校」

住所：熊本市中央区出水4丁目1番2号

電話：096-372-5311

I 学校の基本情報

○生徒数：343人（12学級）12月1日現在

○職員数：56人

○過去の主な災害

昭和28年 熊本大水害

平成11年 台風18号による高潮被害

平成15年 集中豪雨による土砂災害

平成24年 熊本広域大水害

平成28年 熊本地震

II 取組の概要

1 安全教育手法の開発・普及

(1) 学校防災教育年間計画について

月日	取組
7/20	スモール訓練
8/22	避難所運営ゲーム（熊本商業）
8/29	スモール訓練
11/1	熊本シェイクアウト訓練
12/18	避難訓練
1/9	スモール訓練

※スモール訓練（1次避難～2次避難まで）

4月に年間計画に着手。各教科主任に教科ごとの防災に関する取組（単元）を報告してもらい年間計画を作成。全校生徒を対象に活動を考え、また、授業や学校行事との関連も踏まえ、新しいことをするのではなく、既存の計画に防災の要素を加えて実施することにした。

(2) 緊急地震速報受信システム等を利用した避難訓練の実施

緊急地震速報受信システムとは、設定震度以上の地震発生を事前に発報するシステムであり、発報は全館に流れる。また、避難訓練等でも利用できる。

[緊急地震速報を利用した避難訓練]

12月18日（月）15時30分より

訓練では、緊急地震速報を

流し、授業担当者による1次避難指示を行った。その後、家庭科室より火災が発生し、出火場所を確認したのち、校内放送にて避難場所（運動場）を指示。放送後2次避難を開始した。避難先では人員確認・管理職への報告を行い、中央消防署・学校安全アドバイザーより講評をいただいた。



[緊急地震速報を利用したスモール訓練]

計3回実施（7月、8月、1月）

訓練では、緊急地震速報を流し、担任より1次避難指示。放送で避難場所を指定し、教職員の誘導のもと避難場所に避難。避難場所では点呼をとり、人員の把握を行う。また、訓練後には管理職より講評をいただいた。

ア 7月20日（木）10時25分～各HR教室より担任の誘導のもと、体育館へ避難。副担任は、その階で逃げ遅れた生徒がいないか確認し、避難。副校長が講評を行った。

イ 8月29日（火）13時40分～7月同様体育館へ避難。避難後は、学校安全アドバイザーより講評をいただいた。

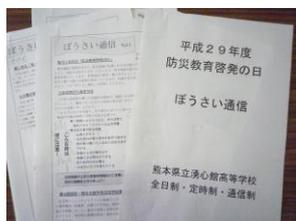
ウ 1月9日（火）8時45分～前回同様体育館へ避難。避難後は学校長が講評を行った。

[熊本シェイクアウト訓練]

11月1日（水）10時～
緊急地震速報を全館で流し、1次避難の態勢をとった。

(3) ぼうさい通信の発行

熊本地震本震の発生日である4月16日にちなんで、毎月16日を「防災教育啓発の日」と定め、生徒の学校生活における防災教育の啓発及び、卒業後の生活での一助とするため、防災に関する情報を記載した「ぼうさい通信」を発行している。



月	テーマ
4月	熊本地震の教訓に学ぶ
5月	防災への備え
6月	大雨、台風、風水害、土砂災害
7月	海や山での災害
9月	地震、防災の日関連
10月	さまざまな自然災害
11月	火災
12月	降雪・積雪・凍結への備え
1月	災害時の心のケア
2月	避難所の役割と運営
3月	今年度のまとめ、次年度へ向けて

2 被災地支援を通じた体験型防災教育の推進

(1) 避難所運営ゲーム

8月22日（火）9時30分～

熊本県立熊本商業高等学校 蛟竜館

参加：東稜・熊本商業・湧心館高校生徒会より7名が参加。福島県うつくしまふくしま未来支援センターの本多環特任教授より、避難所運営ゲームの説明および実践を指導していただいた。

生徒たちは4班に分かれ、班の親睦を深めるため竹ひごタワーを作成。最後には高さを測りそれぞれの班の記録を発表。

その後、避難所運営ゲームを実施。班で協力しながら避難者をどこに誘導するか。

体育館の見取り図を使って、また地域・避難者の年代・家族構成を考え色々と班の中で意見を出し合った。

3 学校安全（防災）アドバイザーの活用

学校安全アドバイザーには以下のような場面で専門的なアドバイスをいただいた。



1回目（8/2）

本校で作成した年間計画を見ていただき、計画に対する様々な質問を受けた。また、アドバイザーがいつ参加されるのかスケジュールも確認した。

2回目（8/29）

スモール訓練を教室内から見ていただき、避難状況や集合隊形などを見られて、生徒たちに講評をしていただいた。

3回目（11/27）

学校運営協議会に参加してもらった。その会では、12月に行われる避難訓練の計画を披露し、計画に対する助言をいただいた。

4回目（12/18）

避難訓練を見ていただいた。生徒たちの避難状況を2回目と比べてもらい講評をしていただいた。

III 取組の成果と課題

1 安全教育手法の開発・普及

(1) 成果

ア 緊急地震速報受信システムの設置により、実際の災害時を想定した避難訓練を実施することができた。

イ 複数回の訓練を行うことで、避難経路や避難誘導の確認などを行うことができ、職員・生徒に有事の際の対応を理解させることができた。

ウ 毎月テーマを決めて「ぼうさい通信」

を発行。生徒達に様々な災害に対する情報を視覚的に示し、自身の記憶の中にとどめさせることで自助・共助の精神を養うことができた。

(2) 課題

- ア 計画していた通りの進行にならないことが多く、職員への周知・徹底ができていなかった。
- イ 生徒たちの取り組む姿勢にもバラつきが見られた。訓練ということもあり移動中の私語が多く見られた。
- ウ 「ぼうさい通信」では、情報集めにも苦勞し、続けていくことで内容が重なることもあるかもしれない。様々な関係機関から情報を得ることが必要である。

2 被災地支援を通じた体験型防災教育の推進

(1) 成果

- ア 他の学校の生徒との交流により、自分の意見を述べることができた。また、他人の意見にも耳を傾けることで、今まで以上に防災意識の高揚を促すことができた。
- イ さまざまな場面を想定して意見交換ができ、生徒一人一人が防災に関し考える機会が増えたことで、内容を深めることができた。
- ウ 熊本地震を経験して、自分にできなかったことが分かり、将来に起こり得る災害に対し、今度こそはという想いが芽生え、共助の精神が育まれた。

(2) 課題

- ア ここで学んだこと・感じたことを周りの人に伝えるためには、どうしたら良いのか。考えて実行に移す必要がある。
- イ いつ起こるか分からない災害に対し、防災を意識した行動を続けていくことの大変さ、難しさ。生徒たちの中の自助・共助の精神をこれからも刺激していかなければならない。

3 学校安全（防災）アドバイザーの活用

(1) 成果

- ア 色々な話しをしていただき、防災に関する情報を聞くことができた。また、自らの取組に対し、指導・助言をいただくことで、改めて防災の大切さを理解することができた。
- イ 計画を立てることで、防災の観点から話しを伺うことができ、その内容を実施要項等に入れることで、充実した取組を行うことができた。

(2) 課題

- ア アドバイザーの方々から、職員向け・生徒向けに防災に対し講演をしていただくことができなかった。前もって年間行事等を確認し計画を立てる必要があった。
- イ 防災に関する講話や情報には勉強になることがたくさんある。それを全て計画に入れていくことができなかった。学校の実情に合わせて取捨選択することが大事である。